

1959 年川崎市生まれ。1983 年にマツダスピード入社。広報担当としてルマン 24 時間レースには 1984 年から 97 年まで出張し、現地でメディア対応した。同年に PR 会社ヴィテス・ジャパンを設立して独立。2009 年には MZRacing を創設し現在に至る。レース速報を専門としながら、自動車専門誌などにも記事を寄稿している。著書『マツダロードスターの 30 年』(三樹書房)など。

大学生 4 年生の夏、私は初めて大橋孝至さんに会った。大学のゼミで広告論をとっていた私は、卒業論文のテーマを「自動車メーカーのイメージ戦略とモータースポーツ」に絞り、資料集めをしていた。運転免許を取得して購入した中古車がルーチェ GS-II だったのでマツダに興味があり、資料集めの協力依頼の電話をした先が、当時五反田にあった東洋工業東京支社宣伝部だった。日産でもホンダでもないところが運命だったように思う。そこで何度かお話を聞かせていただいた担当の方が、「モータースポーツに興味があるなら勝どきにあるマツダスピード(当時はマツダオート東京のチーム名だった)に行ってみたほうがいいよ」と先方に連絡してくれた。そこでお会いしたのが、大橋さんと寺田陽次郎さんだった。就活真っ最中のはずの大学 4 年生にもかかわらず、私はその頃でもスキューバダイビングに精を出していたため日焼けで顔は真っ黒、潮焼けで髪がまっ茶色だった。そんな私をみて、「随分とツッポい学生だ」と感じたに違いないが、二人は熱心に話を聞いてくれた。そして、「論文がまとまったらぜひ見せてください。また、レース関係を仕事にしたいなら、マツダオート東京に就職したらいいよ」と大橋さんは言った。社交辞令だったかもしれないが、まともに受け取った私はすっかりその気になり、就活は中断した。そして、「10 月に富士で行われる WEC ジャパンのピット裏まで来たら、パドックパスを貸してあげる」と言われことを真に受け、レーススタート前のフェンスの裏でチームの方に声をかけた。大橋さんは、「おお来たか、寺田は昨日事故っちゃって今日いないけど、ピットでレースを見ていきなさい」と言ってくれた。グランドスタンドでは何度かレースを見ていたが、もちろんパドックに足を踏み入れるのはその日が初めてだった。レースは、その年(1982 年)の 6 月にルマンで初完走を果たした RX-7 254 の本物が走っていた。雑誌で知っていた従野孝司さん、関谷正徳さん、トム・ウォーキンショーが目の前にいる。すっかり夢心地になったのは言うまでもない。

その日、マツダスピードチームの RX-7 254 は総合 6 位入賞だった。お礼を言ってサーキットを後にしたが、次に大橋さんに会ったのは、私が 1983 年 4 月にマツダオート東京に入社し、営業マン研修を終えたばかりの 6 月のことだった。チームはルマンでクラス優勝し、マツダスピードはマツダの子会社として独立する時だった。願いが叶ってマツダスピードのメンバーとなった私は、数ヶ月間は営業部でスポーツキット商品の受注係を担当した。そして、その年の秋だったと思うが、寺田さんから「明日から三浦は、プロジェクト室に異動することになった。上司は私で、大橋さんが直接監督する部署だ」と言われた。そこで大橋さんは、「世界のレーシングチームにはプレスオフィサーという広報担当者がいる。それを目指せ」と。その日から、広報担当、スポークスマン、プレスオフィサーとはどういう仕事を調べた。今なら iPhone で調べればなんでもわかるが、当時は図書館に行くか、洋書専門店に行くしか方法はなかった。調べるうちになんとなくどういう職種なのかはわかったが、普段は何をして過ごすのかはよくわからなかった。後年になってルマンの現場にも行かせてもらえるようになって初めて、欧州のマニファクチャラーチームのプレスオフィサーの姿をみたが、あの時色々調べ物をしたので、ちょっと親近感があつたのを覚えている。

大橋さんは、いつもダンディでとても綺麗好きだった。大橋さんが乗っていたカペラハードトップやコスモロータリーターボはいつもピカピカ。デスクの上はいつもクリーンで、席に着くとウェットティッシュで電話のコードを綺麗に拭きあげる、そんな人だった。髪型もしょっちゅうミラーの前で直していたし、靴はいつもテカテカに輝いていた。学生気分の抜けない私からは、いかにも前線で働く大人という感じに映った。だけど少し古風なところがあり、客先に行く時は必ず三笠山の詰め合わせを持っていけ、と言っていた。また、お酒を飲まない大橋さんは、「俺の好物はアンパンなんだ。学生のころ海で遠泳をしたら必ずアンパンを食っていた。牛乳を瓶からゴクゴクやりながら食うのが美味いんだ」と言っていたこともある。

大橋さんの思い出で忘れられないのが、やはりルマン優勝の時のことだ。オフィシャルに促されて表彰台の裏に移動している時、大橋さんはサングラスで顔を隠していたが、頬には涙が伝っていた。そして、私にこう言った。「なあ、三浦。男が職場で涙を流すなんてことは、なかなかあるもんじゃないぜ」と。しかし、私はまだ泣いていなかった。やるが多すぎて、全然整理がついていなかったからだ。メディア配信するリリースの作成、速報用写真の電送、モエエシャンドンのホスピタリティで行う記者会見の準備などだ。だから、涙を流している暇がなかったのだ。

過日、2011 年にマツダのルマン優勝 20 周年記念でマツダ 787B をジョニー・ハーバートがドライブし、サルトサーキットを 2 周した時だ。ピットレーンに戻った 787B からジョニーがクルマを降り、オフィシャルに促されてポディウムに上がっていった。彼は 1991 年のルマンでゴールした後、脱水症状でダウンし、ポディウムに上がっていなかったのだ。「彼は、ジョニー・ハーバート!!」アナウンサーの声が会場全体に響きわたり、ジョニーが両手を天に向かって掲げた時、グランドスタンドから波のような喝采が沸いた。スタッフの誰かが「三浦さん、俺たちのルマンはやっと終わりましたね」と言った。それを聞いた時、大橋さんの言葉を思い出した。そしたら涙が止めなく溢れ、止まらなくなった。やっとあの時の大橋さんの感情が理解できた瞬間だった。